

専門家としての在り方

二人目の子どもを授かり、妻と二人で大学病院の産婦人科を受診した。出産予定日まではあと二か月ほどである。一人目の出産を経験しているとはいえ、不安が完全になくなることはなかった。経験があるからこそ、前回との違いや、起こり得るリスクを現実的に考えてしまうのである。待合室で順番を待つ間、妻は静かにお腹に手を当てていた。

診察室に入ると、三十代くらいの男性医師が対応してくださった。落ち着いた口調であいさつをされ、その態度から、患者に向き合う誠実さが感じられた。エコー検査が始まり、モニターに胎児の姿が映し出されると、医師はモニターの位置を調整し、私たち夫婦の双方から見えやすいように配慮してくださった。

医師は専門用語を極力使わず、一つひとつ丁寧に説明してくださった。理解できているかを確認するように、時折こちらの表情に目を向けながら話される。その説明は非常に分かりやすく、我々の表情も次第に和らいでいった。

また、妻の体勢が少し苦しそうになると、医師はすぐに気づき、ベッドの角度や高さを調整してくださった。検査を進めながらも、母体への負担をできる限り取り除こうとする姿勢が自然に表れていた。大学病院という大きな医療機関でありながら、目の前の患者一人に真摯に向き合う姿が印象に残った。

状態についても、「今の時期としてはとても順調です」と穏やかに説明があった。その言葉には、単なる結果の報告以上に、私たちの不安を和らげようとする配慮が込められているように感じられた。

私は弁護士として、日々、依頼者の話を聞き、専門的な知識を用いて説明をする立場にある。しかし、その説明が相手にとって理解しやすいものでなければ、不安を解消することはできない。

医師の姿を見て、専門家とは、知識や技術を有するだけでなく、相手の不安や負担を察し、それを取り除く努力を惜しまない存在であるべきだと、あらためて感じた。

病院を後にしたとき、我々の表情は来院時よりも明るかった。

その後、無事に二人目の子どもを迎えることができたが、あの日の産婦人科での経験は、専門家としての在り方を私自身に静かに問いかける、大切な時間となった。